

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

65

車一台が通れるほどの狭い道砂利道の曲がりくねった赤羽峠を、バスはあえぐようにのぼっていく。坂道を曲がるたびに右に左に揺れるが、それは私の心の揺れでもあった。

「これから行く東京はどんなところだろうか。どんな人たちがいるのだろうか。何が待っているのだろうか」

不安を胸に上京する十八歳の少年を、霞(かすみ)たなびくふるさとの山々が見送ってくれた。あれから五十年が経とうとしている。

東京行きを決心させ、大学への進学を勧めてく

れたのは、高校の恩師佐々木繁吉先生であった。饒(にぎは)の言葉は一言「自分を尽くすこと」であった。

「自分がどういう素質能力を天から与えられておるか、それを称して『命』と申します。それを

知るのが命を知る、知命であります。知ってそれを完全に發揮してゆく、即ち自分を尽くすのが立

命であります」と、安岡正篤先生がその著「活眼活学」で述べられている。

これから社会に出てゆく私に、佐々木先生は「生懸命努力すれば、きつと道は開ける」と教

えてくれた。岩手県立盛高等学校上有住分校(現住田高校)から専修大学へ進み、早稲田大学システム科学研究所で経営科学を学んだ。

「自分を尽くす」

千葉県松戸市 紺野 淳志

経営コンサルタントとして経営者のお手伝いをさせていた。いてる。

「人生、山あり谷あり」と言うが、修学旅行でしか見たことのない東京で暮らすことは並大抵ではなかった。辛く苦しいとき、枕を濡らすこともあった。

自分を尽くせ」と諭してくれた立命の山である。登山の時に道案内をしてくれたのが立花公夫先輩であった。急な坂道を息を切らして登る。額(あ)に陽花や太い五葉松、檜(ひ)の見事に驚きの連続だった。

立花先輩は「五葉山は藩政時代には伊達藩直轄の山で、藩にとっては豊富な森林資源を有する重要な山であり『御用山』とも呼ばれていた」と、沢で休憩したときに水を飲みながら教えてくれた。

五葉山を源に流れいずる川は、小石や岩の間をくぐり抜け、踊るように流れているが、それは苦難に直面するたびに、難局を乗り越えてきた自分の姿に重なる。あたたく、慈しみを

きたのだから。同郷の後輩に何か力になってやりたいというも思う。遠く離れるほどに、歳月が経つほどにふるさは懐かしい。実家の近くを流れる沢の音、迫るように連なる急峻な山々、田や畑での野良仕事、細やかで優しい地域の人々。目をつぶると、霞たなびくあの日のふるさと

恩師の言葉は今なお道先を照らし続け、自分を尽くすことの尊さを教えてくれている。



赤羽根峠から見る住田町の山々。今なおふるさとに育まれ導かれている

リレー
エッセイ